



いつかのさよ ならのために



奥村綾子

—「私」を知る者がまた一人、

この世から減ってしまった…—

その「者」は、魂を奪われ「物」となり、今は棺の中で折り目正しく入れられている。

—なんでえ、畏まっちゃって。花なんかに囲まれちゃって気色わりいや。

そう問いかけても、答えはない。

昔イカれたカメラに怒りをぶつけていた時、妻の晶子が

「カメラに怒ったってしょうがないでしょ。

修理に出さなきゃ直らないんだから」

と呆れ顔で肩をすくめたのを思い出した。

答えてくれない、修理に出しても直らない場合はどうすりゃいいんだ？その回答を私はまだ貰っていない。

—なあ晶子、俺はどうしたらいいんだ？

天を仰いで嘆く。漆黒の大海原へと続く澄み切った青い空は、それでも無情だった。

「徳馬さんも、逝っちゃったなあ」

火葬炉前に行く途中、杖をついて歩く義兄の若木三郎に私はしみじみと呟いた。

「ああ、みんなどんどん死んでいくなあ」

若木三郎が目を宙に泳がせながら、魂の底から吐き出すようなため息をした。

住職の深く重厚な読経の中、義弟の小林徳馬は63年の生涯を、たなびく黒煙と共にあっけなく終わらせた。これで私の嫁晶子とその弟である徳馬姉弟がこの世にいたという事実を知る者は、実の姉である若木春子、その夫三郎、そして私の子供達しかいなくなってしまった。

それは、とても寂しい事だった。

私もいつかは徳馬と同じ運命を辿る。晶子を嫁に貰いに挨拶に行った時の小林一家。義両親の、目尻を下げて喜ぶ瞳の奥の、寂しさの滲んだ目を私は忘れない。まだ18だった徳馬が、慄然として口も利かずに扉を荒々しく締めていたことも。

その時の出来事も、その時感じた心がつまされる思いも、もうこの世で知っている者は私しかない。

「徳ちゃん辛かったろうねえ。骨もこんなになっちゃって」

火葬が終わり、先程まで台の上で死に化粧を施した安らかな寝顔は、ポップコーンのように軽く干からびた珊瑚の数々に化していた。

人間なんて不思議だ。

ついこないだまでベッドの上で高笑いして動いていたものが、今はこれほど小さな骨壺の中へ箸で挟まれて入れられている。そこには笑い声も、しわくちなな笑顔を作る筋力も、もうない。

「姉さん、有難う。今まで徳馬の面倒見てくれて」

「なに言ってんの。徳ちゃんはあるたのお嫁さんの弟なんだから。晶子さんも徳ちゃんが来てくれて、天国で喜んでるんじゃない」

嫁も子供もおらず生涯独身だった徳馬は、

定年間近にして胃癌を発症し、その頃には既にステージ4の肝臓まで転移している状態だった。

最期は抗がん剤治療で苦しみ、歪み疲れ果てた姿は見ているこちらが、病気になりそうな位過酷な闘病生活であった。それでも彼は私達に心配させまいと無理に笑顔を作って冗談を言っていた。

私は姉・春子と共に幾度となく病室を訪れ彼を励まし、自分達をも励ました。姉だってとうに80を超えている。目線は常に大地であるがごとく腰が曲がっていて、いつ転んであの世に行くかといった調子だ。そんな私も今年で80だ。痴呆にだけはならないように毎日朝晩の散歩と図書館通いを日課にしている。

娘のめぐみが、

「お父さんも春子伯母さんももう歳なんだし。私が徳馬おじさんの面倒見るから家でゆっくりしててよ」

と申し出てくれていたのだが、母親の弟の面倒を子供に押し付けるのは違う気がした。めぐみだって自分の家族がある。孫のルカは20歳だが、声優の学校に行っていて就職するまではまだまだ世話が焼ける。義息子の浩二君だって、めぐみがしょっちゅう家を空けたら良い気はしないだろう。

これは私が48年前に晶子を貰った時に決心した一つのけじめなんだ。最期まで、晶子を、晶子の家族を守り貫く。

今日、やっとその任務を全うしたのだ。

四十九日も終わり、徳馬の家で姉と遺品整理をした。徳馬はずっと独身で、小林の両親が亡くなってからもずっと一人でこの家を守ってきた。

会社勤めも終わり、さあ、これから悠々自適な老後生活を送ろうといった矢先に倒れ、15も

年上の私達が世話をするなんて誰が予想しただろうか。

「徳ちゃん、あんな可愛い顔してたのにねえ。順番が違うよねえ」

姉が遺品整理をしながら、体を上下に揺らし、涙を流した。

主をなくした家は、時間が止まったかのようにしっかりとそこに存在していた。振り返れば、今も小林一家の笑い声が聞こえてきそうで、私は自分が死に遅れたかのような焦燥感に見舞われた。

その時、聞き覚えのある女性の声が玄関から聞こえた。

「お父さん、春子おばさん、いる？」

娘のめぐみだった。

「どうしたん？そんな恰好して」

「三郎おじさんに聞いて。手伝いに来たの」

髪を一つにまとめ、スウェット姿で腕まくりをしている。

「いいのに。ルカが待っているんじゃないのか？」

「もうお父さん、ルカはもう20歳なんだから大丈夫よ。それに万が一お父さん達に何かあったら、そっちのほうが大変じゃない」

「人を年寄り扱いして」

「はいはい、お爺ちゃん無理しないでね」

めぐみは笑いながら台所に行くと、迅速に食器から手をつけ始めた。

「やっぱりめぐみちゃん来ると違うわね、スピードが」

みるみるうちに家の中が片付いていき、先程の感傷していた姉はどこへやら、しきりに感嘆

した。

昼はめぐみが作ってくれた弁当を、3人仲良く縁側で並んで食べた。卵焼きの味付けがほんのり甘くダシも少し効いていて、28年前最後に食べた晶子の卵焼きを思い出し、すこし鼻の奥が痛くなった。

今までもめぐみは、私の為におかずを作ってくれると申し出てくれていた。それを私はことごとく断り続けた。

「料理は唯一お父さんの好きな趣味なんだ。その楽しみを奪わないでおくれ」

私はこれでもってめぐみを退散させていた。しかし、本当は料理が好きでもなんでもなかった。食事は生きていく為に必要で、料理をするには頭も使う。良い頭の体操にもなることはわかっている。ただ、めぐみに負担はかけさせたくなかったというのが一番の理由だった。

私がなぜここまで考えるのかと言うと、めぐみが17の時、晶子を乳癌で亡くし、二人の息子の面倒をめぐみにさせてしまったからだ。

その頃長男の実は12歳、二男の静夫はまだ7歳だった。めぐみはピアニストになりたいという夢を諦め、地元の銀行に就職し、25で宮木浩二という男とデキ婚した。

私は大層反対した。家族を作るというのは並大抵の決心ではない。人一人の人生を預かるものだ。それを結婚前に子供が出来たからとて、どうして許されよう。私はしばらく親子の縁を切った。元々子供に自分の世話なんか見てもらうつもりも毛頭なかった。

二人の息子が

「姉ちゃんをなんとか許してやって」

と泣きついてきたが、大声をあげて蹴散らかした。

それでもルカが生まれ、毎年年賀状でその成長ぶりを見ると、「この子にはなんの罪もない。親子の問題でこの子の爺ちゃんを失わせてしまうのは良くない」ということに気づき、少しずつ雪解けのように軟化させていった。

そんな経緯もあって、めぐみには二人の息子以上に負担をかけさせたくないという思いが強かった。

「ねえお父さん、うちで一緒に暮らさない？話し相手がいないとつまらないでしょう？ルカも浩二さんも大歓迎だって言ってるのよ」

めぐみが私の顔を覗き込んで優しく

諭す様に言った。

「いいじゃない、いつ死ぬかもわからないし。めぐみちゃんも、自分の家とお父さんの家を行ったりきたりじゃ大変でしょう。久恒、そうしなさいよ」

姉が加担してきた。その誘いも随分前からめぐみに懇願されていた。小林家の事ももう済んだ、もう完全に一人身なんだ。だからもう何に束縛されなくてもいい。

娘の家で家族4人で暮らす。それはきっと楽しく満ち足りた日々になるかもしれない。ただ・・・。

私はあやふやな返事で、めぐみを帰した。

時計の針は18時を指していた。

外は闇へと向かい、静かに夜を受け入れる準備に入っていた。

「じゃあ私もそろそろ。夕飯の準備しなくちゃだから」

「そうだね。三郎君も首を長くして待ってるだろ」

笑顔で姉を見送り一人になると、急激に静けさで耳が痛くなるのを感じた。張りつめた冷たい空気に、時計の針の音がより一層冷たくしていた。

ふと、箆笥の上の写真立てに目がいった。

確か、晶子が亡くなる一年前、小林家と我が家と合同で箱根旅行に行った家族写真。

あの頃はまだ小林の両親も健在で、めぐみも実も静夫もまだまだ子供で、そんな何気ない幸せが永遠に続くと思っていた。

—いつかはさよならがくる—

私は何人の人を見送ってきたのだろう。晶子が亡くなった時、私はもう死んでもいいと思った。

生きる意味がないと。

このまま人生に価値を見失い、老いぼれて周りに迷惑をかけながら死んでいくのは、真っ平御免だ。

何度も死にたいと思った。

このままふさぎこみ続け病気になって、人生を終わりにしたい。

私は心身共に衰弱していたが、そこに一つの光を見出せたのは、子供達の存在だった。めぐみは母親代わりとなって二人の弟の面倒を立派にみてくれた。実も静夫も私を元気づけようと、外に連れ出したり学校での出来事を話したりと、沢山の笑顔を見せてくれた。

それに徳馬だって、幾度となく私のお気に入りの酒を持ってきては、夜遅くまで付き合ってくれた。

私は父親としての任務、晶子を貰った時の決心を思い出し、再び立ち上がることができたんだ。

では今は何に希望を持って生きればいい？

それから半年後。

日常の生活に戻りつつある朝、それは突然に訪れた。

三郎君が危篤状態だ、と。

こないだ83歳の誕生日を迎え、娘や孫達に囲まれて幸せそうな笑顔を浮かべていたのに。

何度か入退院は繰り返していたが、痴呆も起きていなく、姉は「また風邪でもこじらせたんだろう」ぐらいにしか思わなかったらしい。

私が駆け付けた時には、既に息を引き取っていた。

また、私を知る者がいなくなってしまった。

私はいつ死ぬのだろう。もうこの歳で死ぬのが怖いとかそういった気持ちはない。ただ、こ
うやって一人、また一人と私の存在を知っている者が徐々に減っていく怖さがあった。

「姉さん、大丈夫？」

病室でこじんまりと椅子に座っている姉を心配し、声をかけた。その姿は呆けにとられている
ようにも見えたし、まっすぐに現実を受け入れているようにも見えた。

「なあに、これから忙しくなるね。まずは葬儀屋さんに連絡ね。坊さんにも連絡しないと。そ
の前にまずは洋子と文子ね。あの子達電話出るかしら」

私に心配させまいとしているのか、早口で言いながら病室を出て行った。

私はベッドで横たわっている三郎君の顔を覗き込んだ。これが、誰が死んでいると思えよう。

とても血色良く、いびきでも聞こえてきそうだ。

「なあ三郎君、君も逝っちゃうのか。俺も姉さんも寂しいじゃないか。姉さん、どうやって生きていけばいいんだ？そりゃ今は気も動転してるからわからないだろうけど、これが落ち着いたら姉さんは腑抜けの殻になっちゃうんじゃないか、なあ」

半年前三郎君が、徳馬が亡くなった時に言っていた「みんなどんどん死んでいくなあ」という言葉を、私は今これでもかといわんばかりに、苦々しく感じていた。

姉は、気丈だった。

事務的な手続きをてきぱきとこなし、とても80を過ぎたばあさんには見えない対応であった。通夜も葬式も納骨の日でさえも、姉は一粒の涙もこぼすことなく迅速に動いた。

徳馬の時はあれほど泣いていたのに、自分の旦那となるとそれ程悲しくないのだろうか。

私は不思議に思って尋ねると、

「徳ちゃんは63歳で病気。うちのは83も長生きして老衰なのよ。大往生よ。今頃徳ちゃんと酒でも呑んでるんじゃない？あー、いい気なもんだ。私も早くそっちに行きたいわ」

と、まるで三郎君がどこか遠い国に旅行にでも行っているかのような口ぶりで楽しそうに笑った。

私は、三郎君を心底うらやましく感じた。今は老老介護だの高齢者の独り暮らしだのが問題になっている中で、奥さんの傍で老衰でぽっくりと逝ける人生ほど、素晴らしいものはない。

一なあ晶子。俺はやはり残り少ない人生を気ままに過ごすよ。めぐみとの生活も楽しそうだが、デイサービスのよっちゃんもいるし、老人会のみんなだっている。孤独死なんか怖くないさ。いざとなれば、施設に入ればいい。それまでは、まだ動く自分の足で、手で、耳で、すべてを使って精一杯生きてみせるさ。素晴らしい家族が、小林家がこの世にいたことを決して忘れない。

いつか私にも、姉とめぐみとのさよならが来るけれど、沢山の思い出を心に刻んで生きていくことが供養になるなら、私は精一杯生きる。

修理しても直らなかったら、その時は笑って待っててくれよ。

了